

## 37 中世の医学者アルナウ・ダ・ビラノバ

泉 彪之助

介護老人保健施設 陽翠の里

一般にアルナルドウスあるいはアルナルド・デ・ビラノバとして知られるアルナウ・ダ・ビラノバは、モンペリエの医学校で教鞭をとった中世の医学者である。出身はカタルーニャ（バルセロナを中心とするスペインの北東地方）といわれ、演者は今もカタルーニャでアルナウの活発な研究と出版が行われていることを知り、文献を入手した。これらの文献は、四編がアルナウの伝記・研究書で、うち三編がカタルーニャ語で書かれ、一編はカタルーニャ語文献のスペイン語訳である。他の二編は、一九九四年、二〇〇四年にバルセロナで開催されたアルナウに関する国際シンポジウムの記録である。以下、推定を含んで、アルナウの生涯を概観する。

アルナウは、一二三五年ごろ、バレンシア近郊に生

まれた。アルナウが生まれる百年ほど前、バルセロナ伯とアラゴン王の一人娘とが結婚してカタルーニャ・アラゴン連合王国が成立していた。バレンシアはイスラム教徒に支配されていたが、アルナウが生まれたころ、カタルーニャ・アラゴン連合王国に征服された。バレンシアは現在、カタルーニャ言語圏に属する。

アルナウはモンペリエで医学教育を受け、神学も学んだ。南仏が以前カタルーニャの一部であったなど、カタルーニャとモンペリエが密接な関係にあったからだという。アルナウは土地の女性と結婚し、六、七年をモンペリエで過ごしたが、ナポリに移り、そこで学習を続けた。やがてモンペリエで母校の教授となり、一〇年間教鞭を取った。それに先立ってアラゴン王の侍医となり、その子のアラゴン王、シチリア王、さらにはローマ教皇の侍医となった。一二八二年に、有名な「シチリアの晩祷」事件が起こり、シチリアからフランス占領軍が追放され、アラゴン王がシチリア王を兼ね、後に息子たちが両方の王位を継いだのである。

アラゴン王の大使としてパリに滞在中、アルナウは

異端を疑われて投獄され、地位のある友人たちの斡旋で釈放された。ローマにもどつて、ふたたび教皇の侍医となった。アルナウは多くの土地を訪れているが、故郷バレンシアでは、ドミニコ会士と論戦した。異端審問にも遭つた。またマルセイユでは、同じカタルーニヤ人の思想家ラモン・リュイと親交を結んだ。

一三二一年、アルナウは、シチリアのパレルモからの帰り？、ジェノヴァに近いところの船上で死去した。アルナウの医学的業績は、次のようなことがあげられている。

(一) アルナウは多くの著述を残したが、医学でも沢山の著作を書いた。それらは大きな影響を持ったが、中でも (a) アルコールの、消毒薬、創傷治療薬としての薬効、(b) 感覚神経、運動神経の記述、(c) 麻痺の種々の面の記載等が注目されている。

(二) 『アラゴン王への養生訓』の執筆。『サレルノ養生訓』の最初の詳しい注釈。

医学史上はこのような業績が挙げられるが、医師としてのアルナウは、宮廷侍医としての経歴が注目され

ている。

またアルナウは、錬金術師といわれたこともあつた。医学だけでなく諸学の天才とされているが、これには中世という時代もあるう。

神学におけるアルナウの苦闘も注目される。異端を疑われたことは有名だが、改革主義者としてのアルナウの活動によるものであるう。